

藏書圖志

卷之四

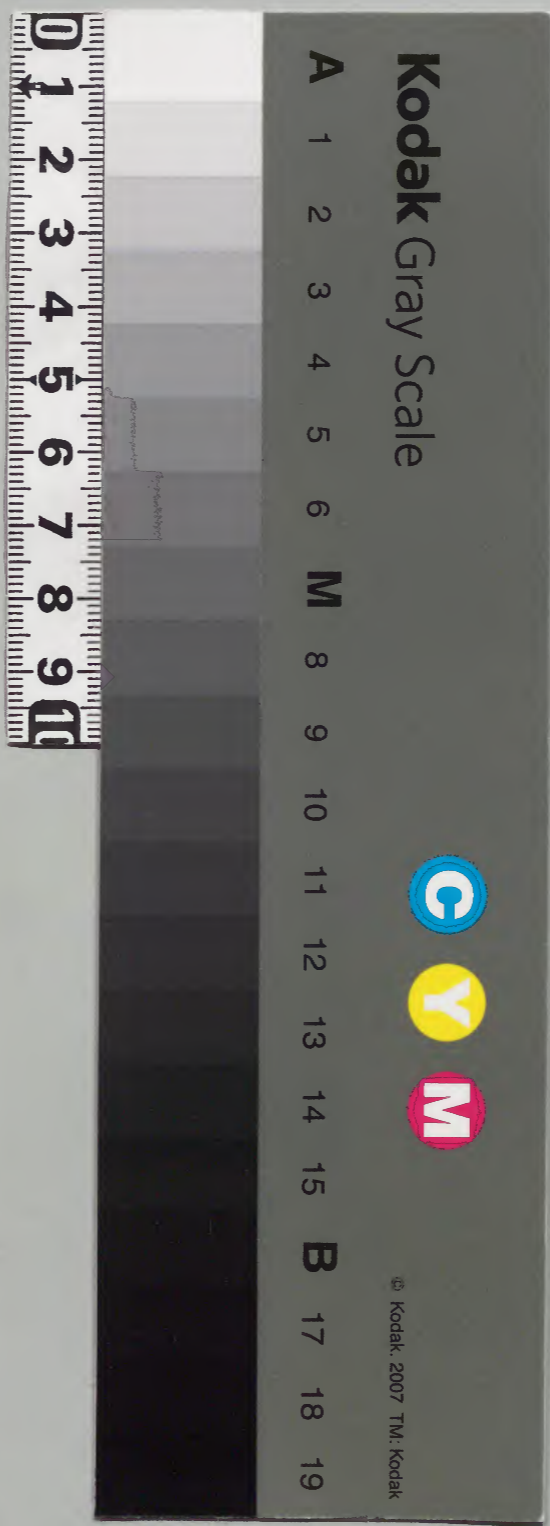
內閣文庫			
一六五函	一三四冊	三六五四號	和書類

(四方)

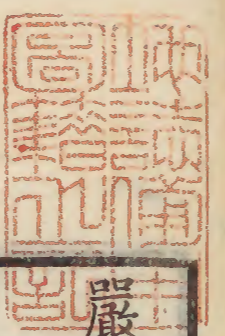


內閣文庫	
番號	和 36544
冊數	10 (4)
函號	175 191

地六五



1225

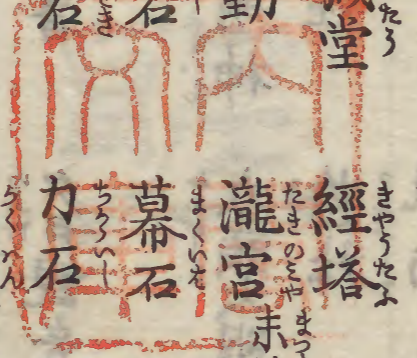


嚴島圖會卷之四

目錄



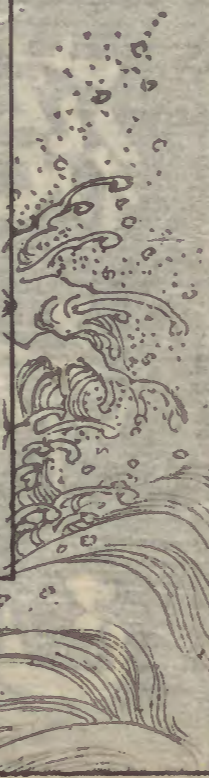
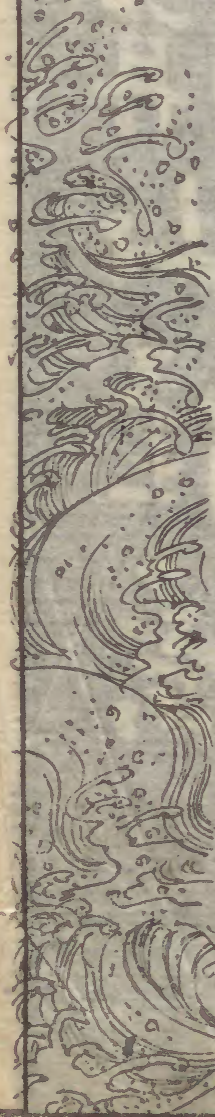
- 彌山 ミセ 神鴉
- 火消不動 ヒケシ 不動
- 白糸瀧 シロイト
- 岩屋薬師 イワヤ 薬師
- 水晶石 クリン
- 満于岩 マンヨ
- 地御前遥拜所 チノミゼン
- 口所明神遥拜所 クチノミヤ
- 頂上石 トウジョウシ
- 岩屋不動 イワヤ 不動
- 石地藏堂 イシジザウ
- 祈不動 イノ
- 御幸石 ミヨキシ
- 灌頂石 カンジョウシ
- 大日堂 オホニチウ
- 自洗薬師 ミソギ
- 鐘撞堂 カネツキ
- 六地藏 ムツジザウ
- 湯殿山神社 ユドノサンの
- 白山権現 シラネ
- 鐘撞堂 カネツキ
- 大師堂 オホシ
- 愛染堂 アイゼン
- 中堂 ナカウ
- 二王門 ニオウモン
- 船岩 フネイ
- 疥癬岩 シヤンイ
- 龍燈杖 リウとう
- 聖天堂 セイテン
- 文珠堂 モンジュ



神 聖 躰



石川丈山書



大威徳明王堂

行者茶師

求聞持堂

曼陀羅石

日輪觀音

荒神

龍窟

熊野推現

錫杖梅
瓶華柏

三鬼堂

水手向地藏

龍馬坊

朝日觀音

虚空藏堂

荒神社

闕伽井

奥院

十王堂

三劍窟

夕日觀音

伊勢遙狩所

玉取岩

弥勒堂

善女龍王

繪馬岩

地御前

速田大明神

大瀧大明神

宦幣社

府中上田所氏

大頭大明神

惣社

抗島

天王社

角振社

高田會卷文四

馬弭山佳景

夫真山真水得
以名稱者豈止
巍然高從而已

哉以其靈以其
秀難以形容拙
擬者是也至於
巖嶋之弭山可

以筆端描寫乎
試且陳之風恬
而草木長雨泮
而菰蒼蒼生雲帶

山腰水湧泉穴
空谷傳聲羽藻
綢繆郎指之曰
瀛洲不異域也

西指之日蓬萊
不旱景也桓
嶺徑華岳之迴
峯凜檜杉未

龍之並壁日衣
煙霧齊飛晚
虹霞吐布中亭
任足感嘆易逝

之居諸序研容
噓嘯傲穹窿之
蒼老小社重層
神目如電天字

屏岫鐘鳴獻享
白絲有似白陽
池櫻壇却認杏
壇春企徑遺踪

空海顯踪

瀑布 硜石 響音石

且爾二王木客

以默傳玄教天

士彌陀立法施

慈悲求闕持以

達天機被護之摩

而通神禱袞帝

靡戲人我忘形
噫有是日靈尊
之辭讓
市杵姬之賢儀

而此山更增其
靈秀也隆哉壯
哉不顧一望眼
窮數國若經畧

躬視淘海之漳
洋古謂登泰山
而小天下今登
彌山而始知藝

邦之天乎即崑
崙天台齊雲亦
面東拱矣予視
之未能禁筆

卿書一篇以助
遠往者一唾云
爾

乙酉春三日

亞聖鄒國公六十一代孫

士式撰



士式、孟子の裔として漢土杭州武林郡の人、明末我日本に歸化して武林治庵と稱せり。四世の孫武林唯七、赤穂の義盟に列し、事人の能知る処に今も其子孫當藩に存せり。



弘法大師を
 上るる
 契沖
 佐伯やま
 うしひまの子法
 わくまき
 かるま紙ちりと
 入るやいそと

文揚



弥山開基の由来
とせういき
ゆふ

嚴島圖會卷之四

弥山 大定の法よりて靈秀なる山をいふ登路十八町

夫當山の高野弘法大師の寢基なり大師姓の佐伯名の空海弘法
の井の謚なり讃州多度郡の人母公曾て梵僧懐入ると後尼
てみち身むことあり十有二月より生る長どくふく仏乘は歸
依せり凡皇國佛法の興隆この大師乃力より何れとて何れ
延暦二十三年異域より大同元年は歸朝して偏く靈地を求
めたまふこの地祥霽漢くとして立昇るるは靈場なりとて梵
閣が造立し山の形此窟元たるを須弥を表して弥山とい號し
まへり一説はみせん山義にて明神の於りま次山なるを以てかく称せり然るを佛場を寢きて後殊のまよりなりとありかまへ當山の大師の
靈蹤たるいんも更なりその形像や前より神殿参差として
青龍の蟠蜿せるが如く深まへ巨海浪高くして皎月其如の影を

宿霧り白雲頂上は變巖松杉鬱茂して山勢異相なり本るその
佛觀堂塔處を得て不退轉の地を占免護摩脩法の烟たゆめ
ことな久鈴鐸のこゑ鏘くとして四海の昇平を祈る於て
山は鞋鞮を入る者晨鐘は踏み下るを例と次聊もこ
れを侵すと死の果しと怪異あり殊に觸穢の案に立は譴罰を
受るるとりげは靈神の巖窟本窟の巢穴とてこの巖のどを
ふなる按て大師の山に心をこめてたたまふと卷一信盛公靈夢の件は併せても然り

○弥山つねは靈異あり或は時とて火の燃るるとあり其火炬火より赤
くく掛るを徹洞はるが如し松枝葉をさかりて鮮くまはゆきて
山靈のなは不尋常燐火の類ひは何れ俗に弥山松明といひそ
恐懼尊敬せまて火危本の音の如き響をなはれとありこれハ山
上のまはり次大宮の辺までもあり島人の馴て怪とせ次或ハ島人

ても糸情の人よても我慢ちる者あれ弥山もこの本社の色も大なる男の長け一二丈も何とんと打ちゆる山伏は行きよ何と何とこの時
いふちる剛強の者とも身心迷乱を然れとも其身ひとり
於てそそ曾て他の月小觸るとなまき雪の朝は
大宮廻廊の
屋根舞臺のうらなまき一丈何まりも踏み跨たりと打ちゆるをかりい
と大なる足痕ありとこれを俗に雪の何といふまき山上ある浦を
まて黄昏のころ多くの人声流るる何りこれを俗にまきとといふケビ
の約キなれは汚叫びの義なるべしまき市立の時遠近より群集れ
るが中は汚穢不浄の人鳥林を侵し宿るとたの其家鳴りけり
き梁柱の戸小至るまで顛倒するが如し一時をかりよ止で本のと
し然むかりのよをも左右隣家より更りよ次これを俗に天狗顛倒
とよ上件をうのよとよな山靈の「かき」むるよよと最も人乃

懼る下なる

登弥山率記所見古詩三十韻

石川文山

嚴島蒼溟上。弥山素雲邊。廟貌歷垠堦。霞關溢
穹天。伊昔蓬瀛地。縹渺棲神仙。應真飛錫翁。安
期賣藥還。谿硯坤軸斷。崆峒日輪旋。渙汗懃樹
蔭。祖謁盥飛泉。旁磚無人境。登臨意惘然。艾草
醉玄解。松子飽僮僮。巨石競怪狀。遠客愕屯遭。
浮景接崑閬。層陰延震淵。回顧踞疊磴。跼步凌
絕巔。俛仰忘身世。騁懷獨踰躑。魍魅時出没。蝙
蝠晝飄翩。歸墟千仞谷。弱水萬里舩。對西青嶺
聳。亘東翠微連。白鳥有雌雄。振古不知年。羽飛
巢壽域。幾度見桑田。日靈尊如在。市杵壺所躔。



家集
山高之
落葉
濤の
白糸ハ
空小
みど
玉
あつ
月
夏原清正



龍の宮
白糸の龍

白糸龍

白糸龍社

龍愛神

不動
愛深

茶師

高倉帝白糸
の瀧敷覧の
畷



画所預肥後介藤原光文



二聖三千載。小祠八九椽。空海据神區。遺未聞
持傳。蒲牢吼栢麓。華表峙。術阡。猿叫。煙霧裡。鹿
卧。殿堂前。木客姑獲鳥。化鬼又變。鷲。屋僧。曾被
害。群民懼。為度。嗟非有道骨。疇能久。誓旃。多病訪
負局。修生問。稚川。高。踰。嘯。巖。曲。薄言。避。塵。綠。早
洗。許。由。耳。將。拍。洪。涯。肩。茲。游。重。難。繼。卑。懷。聊。欲
宣。讀。者。可。姍。咲。信。筆。記。一。篇。

とらふみ草云。阿はて。弥山よのほんそ。瀧の宮へたちよ
ふ糸乃たきかたぶ。糸こたう。彼方へゆき。欠ぐり。靈佛。靈
社を。ね。た。ふ。い。く。と。後。と。い。ふ。げ。を。う。次。危。樓。生。か。を
び。え。て。雲。を。た。び。飛。器。前。を。わ。海。よ。の。そ。え。り。蘿。を。よ。ち
て。の。巖。窟。よ。り。り。松。う。根。を。と。り。て。洞。底。よ。く。く。石。泉。一。たり

神鴉

おちて。青苔を。を。え。て。こ。た。う。猿。の。子。を。よ。んで。木。の。實。か。め
さう。鹿。の。人。小。を。た。ね。寺。つ。小。の。れ。あ。り。つ。ら。て。位。頂。よ。坐。せ。せ
忽。ち。う。つ。登。仙。さ。る。ご。と。浦。田。の。く。ま。り。ま。つ。海。を。眼
下。ゆ。り。か。ひ。て。蜜。の。小。舟。も。松。の。こ。の。名。よ。ゆ。さ。か。ま。う。は。て。車
堂。虚。空。藏。よ。も。う。て。佛。舎。利。三。光。石。な。ど。お。ね。た。ま。う。う
求。少。持。の。行。者。は。齋。を。供。養。し。佛。供。物。を。頂。戴。し。た。く
の。院。弘。法。大。師。の。前。よ。め。づ。き。を。た。り。舟。よ。う。う。つ。り。舟。を。と
に。の。山。の。守。護。神。ま。し。く。て。か。く。不。淨。を。い。ま。し。え。と。う。は。死
て。酒。を。奉。り。二。王。つ。り。ね。さ。の。雨。中。も。笠。を。制。せ。り。も。し
ま。む。く。人。阿。比。の。神。罰。た。ち。と。後。よ。り。と。と。糸。信。の。人。こ。つ
し。み。ね。う。り。を。な。し。傳。り。き



二王門



弥山ミヤマ
全畠ぜんげつ

この山は雌雄一乃ありて年々子を育一相代まり山内の凡務もとより
幾百子孫とよみねをりし次といども神祇の所ありちりもたちよ
るこそ能ハ次その靈異ハ卷二養父崎社卷四速田社よみハ一く奉たまハ併せ
見テ知べ

弥山神鴉 八景の一

こけ屋まの官居をけいでいとせり次々鳥のつらひをなほ
鳥先々小舟の神やんひくく和まかす生の波みなりく
山形如湧趣尤奇林抄深邊雄與雌。豈有群
鴉争茂樹一雙萬古護靈祠。
山靈高占碧崔嵬。千歲祐民最異哉設供舟
中吹玉笛一雙玄羽出雲來。
峰峻靈嶽瑞煙霏。遠見黒衣下翠微。蘋藻巧

中納言輝光

宣阿

桂洲

僧獨麟

僧日峯

脚斜日外。翾々時掠客船帰。
妙高巒聳海中天。神鴉乃棲知幾年。華鷄有
時鳴賽鼓。排雲脚供去翾々。
一拳螺髻涉茫中。老樹周遭天女宮。又有神
鴉能報吉。舟行長ト去來風。

僧瞻雲

伊藤東涯

石地藏堂 石山登路の
經塔 上二回一法華一字
大師堂 上二回一明二年東町の
火清不動堂 徳の言のまゝなりし火伏の
新不動堂 同不動なりし大空堂なりし也
傳いふ豊長大岡征韓の浮その護身佛を藏たまひとを古抄に
小毛利家人佐世共之九箇元宗造とし何くも真書子文録元年三月十日



伊都岐嶋旆山

水精寺

奉施入

治承元年春二月日

遠立聖人永意

施主右大將平宗盛

本將軍關白太政大臣太閤秀吉公高麗御弓矢被思立同二年高麗
悉從八月御歸朝為未御沙汰記置者也と有り太閤の護身佛也よ

いよいついこきふ據はるるべし

瀧宮

弥山の半腰小湧り一

祭神湍津姫命

一説はハニ女神を祭るといふと詳らざるは生る里老の
神はハニの宮ハ、高麗大明神の女はハニと地乃

未社

祇園牛頭天皇
歳徳神

愛深堂

瀧の宮のわき
えふふゆり

白糸瀧

たきの宮北
山上はゆり

漲りおつる瀑布のはらまをそに白糸が乱せらるる如く
人騒客の往々にさるる結ひさるる雨なり夏月螢火多くなりて
水の縦横よりちりまづみ恰も小文の縦縷は似たり

高倉天皇御幸記よいたく日もらわしうハ瀧のや一ま

あつとたまふ公顯僅はるるよとてかきつるる

や井よりおちる瀧のよふちねりてむすぶひのりき

いよいついこきふ

や日たき登れのはらまをそに白糸が乱せらるる如く

瀧宮水堂 八景の一

このやれ光をへるやよひくのわさるも瀧のたまをみ

瀧のわねももつ先次玉植のたまをみこね堂とひくふ

たまは浪よるい堂のひうまをばけいほまもるるうめもつね

あつとたまふ公顯僅はるるよとてかきつるる

たき浪よりがくつりるるあつとたまふ

森々緑樹遠宮邊南岳懸雲吐立泉萬點水

螢三伏夕涼風乱影似秋天

靈祠夜静氣如秋耀々群飛燦中流因憶古

曼珠院法親王

右中轉亮宋

権大僧都惠通

宣阿

難波 野坡

廣島 風律

藤原總長

黄檗 僧即中

曼陀羅石



文陽

又作曼陀羅
山黃凡
北山山員





追張鬼神

時層鬼神

三鬼堂 さんきだう

弥山賞月

春水

非隨仙侶來
安觀仙山月
直自海心升
又於波面没



人本數斛光編岩谷樂優遊。

澗陰古廟倚慈籠自是幽人避暑宮晚映水

簾螢火影輕和濺沫逐微風

僧攝麟

涉幸石 瀧の前の平らなる岩

幕岩 弥山登路十一町より山の半腰より公をくぐり仰の岩

中堂 登路乃休

岩屋薬師 日正の上方より崖の内より安置せる所なるなり

灌頂石 同十に下

力石 名義詳ならず次里談はへなく前の園守福島方直左夫正則登山の所記に處よりく怪異あり

二王門 金剛力士二軀をたかりこれより上弥山の本山より登路十五町同なり越末の時より三後を

水晶石 二王門と大日堂の間あり丈余の大石より中央より

大日堂 禁より十八町弥山の本堂より所謂神護寺これなり



傳云大日元年本堂建立なりと按之弘法大師の帰朝まはるる年

まはるる海路のついでにたちより給ひて罷りたまひんこと灼然なり

草創記より往年のころ空海上人このまはるる渡海一その灵験威神

言詠乃断なるをんて弥山を建立一瑜伽の法水を汲て三森乃月

を以ま一真言秘密の乃場とせり 下畧の按は大師の作山取の待とるもの

覚鍔堂 乃奥教堂

覚鍔上人の平将門の局胤より肥前の人なり康治二年入寂一

たまつ高野大師此流を汲で根来乃法水をたへなまつ比類

次くまき真言の学匠よりがねハルまの詠一奥教大師と謚を

多ひる曾て大師の回跡を慕ひこの山よとけ入て求聞持を脩せ

らま一といひ

船岩 日正より拾石地方の巖より上は諸本を生せり散の

満干岩 同取はあり岩の半小腕を容れ其の小孔は潮水ありていらある早年小もかきとて衣一
つ海潮の干満に從てこの水も増減を度し居るに高頂はありをたぐ塩菜のかよ
へこと一奇

同洗薬師 同取の傍はあり眼を憂ふ者この満干岩の潮水を以て洗ひ
奉尊は祈るとたへ験ありとて用てけ名あり

札乞阿弥陀 同取

疥癬岩 同取はあり觸ること執思む畏し
觸るは疥癬を生ずとて

地御前遙拜所 同取はあり下を以て一〇の石は烏帽子岩といふ
名石あり形修るをも一号く

湯殿山神社

四所明神遙拜所 同取はあり丹生高野を以て
處をさして

六地藏

龍燈杖 同取明神遙拜所
の杖を以て

枝幹屈曲して龍の臥せらるごとく實小莊百歳の樹なりこの所
より海上よりかぶ龍燈を拜せしが故小名と次龍燈は正月元日よ

り三月また六日風静らぬ波穏らると此大宮の沖手に現る年
小よりその多しなり最初一燈をかび出るとんす小須臾してまた
傍より一づきの數六七燈より三十五小至り後混がてまて一燈
となる火色常の燈小異なり次曉ちるころ消滅を正月六
日の夜に腰細浦に色は澄み出づ毎年この夜府下并は遠境のも
のこの山小攀降り毘沙門堂に参籠して臨觀せしむく弥山は未時
より後詰づるや禁禁せりこれ山靈を恐れたるなり然るも今夜小かき
りて男女老幼の別なく群集せしむるも怪異のありと例なるが
由名もあやむ者なり一年よりうて風波のゆるたとき火光動揺し
て見定むかて一ねよき當島奇靈の多かるが中にもこの龍燈は都
鄙衆人のんちとて後より疑ふべきあり次

頂上石 高き三丈圍は丈このところ
弥山の後頂なり



護摩谷 ごまたに



十一面観音 じゅういちめんくわんおん 同西子

白山大推現 はくさんだいのせんげん 日下の下子あり
下子あり

聖天堂 せいてんどう

岩屋不動 いわやふどう 平橋のかげりあり
中は本尊を安置せり

毘沙門堂 びしゃもんどう 日下より方
三間五尺 本尊毘沙門天

鐘撞堂 かねつづき 洪鐘を懸たり右大将平宗盛公の寄附
なほその銘別子載せ

文珠堂 もんしゅどう 鐘樓より下子あり
下日

大藏徳明王堂 だいざいとくみやうどう

虚空藏堂 こくうざうどう

伊勢遙拝所 いせえんげん

行者薬師堂 ぎやうぎやくしどう 本尊薬師如来

熊野推現社 くまののじんげんしゃ

弘法大師の作永開持行者の護佛と次



荒神社

永聞持堂

桁二十五間梁
本尊虚空藏
十五間
三尊を厨裏に安置せり

師作

昭士千手観音十一面観音

兩尊とも作詳

この堂に弘法大師永聞持脩法満坐の靈場より閑持の火今また
え次凡来す持の石場廿四座ありて脩法の行者一日もたつてな
し長享元年に再興ありしを慶長年中福島正則より脩營せ
る

錫杖梅

永聞持堂の
前あり

弘法大師より来て登山のとれ携へたまふ錫杖を建置たまひしが
生つてたりしなりその法香尋常のものなり次今小至るむり乃
春をこ次は

瓶華柏

日取よ
あり

大師佛前の瓶華とせる柏の枝を地はけり置たまひし儀程もたなく
枝葉生出て大樹となりぬ總てけ山は放て永聞持脩法の行者の
の枝を瓶はけりその生枯を以て満坐の成不成を兆はることあり
勤行の七十五日を以て一座と次

時雨楼

堂前あり

花重く露稠くし山風よまきし疎雨の次々が如く因てこの名あり

関伽井

堂後の岩下より大師脩法の時乃加持の
明星水より今も法測其味なり

玉取岩

日取ありて昔人あつて海上より望みこの山に璞玉
ありて取つて取つて今も三三をわりの孔岩あり

曼陀羅石

永聞持堂の下より板十丈の
盤石より石面平らなり

大師石面は梵字を書きしはこ真字にて三世諸佛天照太神宮正八

幡三々七百余座の字を鐫りたまふ

三鬼堂

瑞垣二十間盤
石のくは建つ

祭神三座追帳鬼神正

魔羅鬼神

方時眉鬼神

方

右

この處松柏生ひ茂り前ハ数百丈の徑登海は枕して人を了て股慄
せしむまた遠望の景ありて伊豫の山々黛のこく釣次了蟹の
小舟までいな鳥結の客ふりげはとらふとあり

奥院大師堂

金剛燈籠堂并に龍取ありこれより南下の路あり此の山の巔に帆檣石といふ名石あり形の似たるを以て号けりまこの鏡岩ともいふこの遠方より望むと龍の鏡臺に似たれなり

彌勒堂

日下あり

日輪觀音堂

水手向地藏

十王堂

飛不動堂

本尊不動の覺鑿上人

傳へいふもこの不動尊ハ周防の岩園にわたりて一年彼方ハ祝融の
祟ありと龍當山ふとび来りたまひぬといふ依て飛不動の汚名を
ハ負せたりまづ今も岩園の城を吉川氏より毎年米拾石をよ

せられまぬをりく堂宇の修理あるもこの縁故なりとぞ

善女龍王社

荒神社

龍馬場

巖上は馬蹄の跡あるを以て一騎が林と
もいふ弘中兄弟歿死のころ後たり

陰徳太平記曰弘中参河守ハ陶入道大元を以て一戦せられを取て
く一横食よからんと瀧本の観音の傍に暫ひく入てその松をう
かひひきまども入道終より一もせけやみくと落行りまば弘中つふ屋
まけるい金善ハ勇は元就よも松とふべき人は非り一が運が盡れ心まで臆
志けるもや一夜も取てく一もまけるを惜むまは齒嚼く彌山に登
り奥院まで腹切べいと三百余人分上りけるが次才ハ落行り程に
兵百騎許なりまづかゝる所は弥山は求聞持修行の爲に此院は家の
僧の居たりる如尼まば尼人たりまづ僧はる学匠たりまれば隆包最

後小相見し後生一大子をも授りまた無跡の吊をも受むやと思て
彼僧を呼びしむこの僧隆色をえて儲もくす所(い)うていま次と
いひらる間合戦の行状一と語りし僧のま今朝曉方より関の声は
すえはつる木どに合戦いふ成行はやんはまども防州方の猛勢は
てり(い)一定うち勝たまひちん次とて替存ひひし今かき流る松
更よまともねぢえむ現とも糸(む)といひらま隆色かく修羅及み
於て滅を取り者いいうなる法を持て成佛仕るべき即身即佛乃
密旨をも授けたま(と)請ふ僧阿字の一刀を提起して生死をも切
断し涅槃をもまた切て奉来空の田地ふ至りた(と)示しられ隆
色修羅の苦患殊免まがごとくけ玉り好今法僧の示の旨
趣み至りけいこの苦を遁れ(ま)や僧のいそく修羅の業を以て修
羅の業をうち破したま(畢竟空の田地阿字奉不生の心小至てい

修羅の業いさぐら受たまふべき修羅の剣戟へつて阿字の一刀と變
い(い)といひるを聞得てはてい法僧の示に依て修羅及此阿責を
免ふべきの有秘さよとて妻子眷族乃許(最後の遺書を認め
たきそれより龍が馬場とて弥山は對せる嶺上へ攀上り敵よせ(こ
の節祈は擡て花と一軍と戦死ま(と)を待りけるこの由
告來りなれ元統一人も残ら次討取人と兼て用意せし柵乃本
持集め結廻し一人も洩ら次たと下知せし(は)早旌の若者
共吾もくと竜馬場へ馳上り柵を結んと次る所を弘中百人許
真逆に突て驅りし(は)諸の者共散くみ成て引まけりかりる
不元春五百騎許よて馳上り弘中と無(と)と渡合餘さ(洩
は)と攻戦ひる弘中父子ち(は)び(は)郎等弘中(は)郎吉夫日勳(は)
白崎十兵衛和木(は)八幸(は)弥(は)とい(は)兵ども(は)交を(は)最後と戦ひ





其二



少社も何れ救管度の合戦に當り上は今朝曉天より後兵糧を断る故腕ゆるまり眼くらむ後、寤るに家人は半はれけし人より加らしとやおもひんまこ龍が馬場のはりま巖の陰へ引退きたり彼亦一はついで攻上りま板をかりしに預て柵の末一つと結廻しり程また龍中の名網裏に奥の異なる後弘中兵と母いまこ三十余人そへてあがりるが始を今一夜たくりて快く付死せんと齒嚙し居るははれも日二日の朝より勇業も後とけるやあれ如何なる便も出来て弘中殿父子命助うたまひ吾も恙なく故はつる由もなと願ひ思ひるは吉川慈谷両子の者ども詞を盡し方便一人宛よびり弘中殿父子降参したまへ元就も先年の親しくゆひ隆包父子なれば一命よれいてハ助らるまよてゆ弓の弦をたよをぶさばハを別のといはるは

て面々の衆中於てをやく降参しといひはま誠とや思ひらんはた偽なるんとハねもひながりも一命や助ると空類にてわたりらんを降参し出さるけるを其中にて小賢き者を擬し出しまし龍馬場へ歸しつる隆包父子の降参り大聖院の僧都良西昨日今日け元就一歎き申はる依て元就も舊識に次れよく移れぬ故一命助らるるの降参り早く降参し出たへといせせりしれを弘中聞てからくと答ひ元就一味せんと思えばその島いまこ渡りんはあまを怒るも角も計之る入る島一もそれより戦はかく成べく思ひ後参り故陶殿も再三責んを加へつるなりたと一傑も元就の助へく宣ふとも吾何ぞ檻中の虎の尾を揺りて憐れをよ行迹をばな次へんや入道も死せると母なほ山口は板十郎内藤弾正陶五郎こと親の大勇の者あり



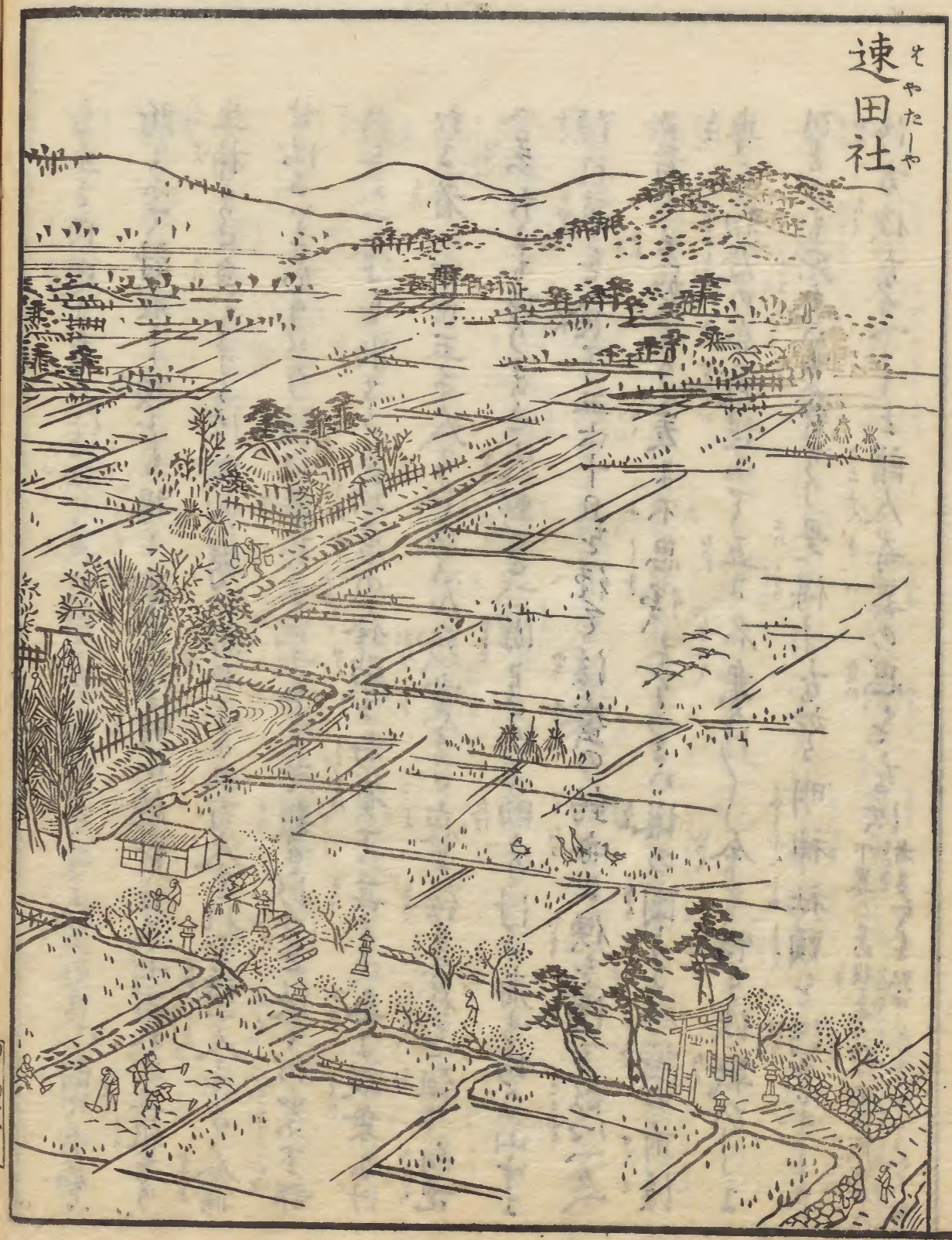
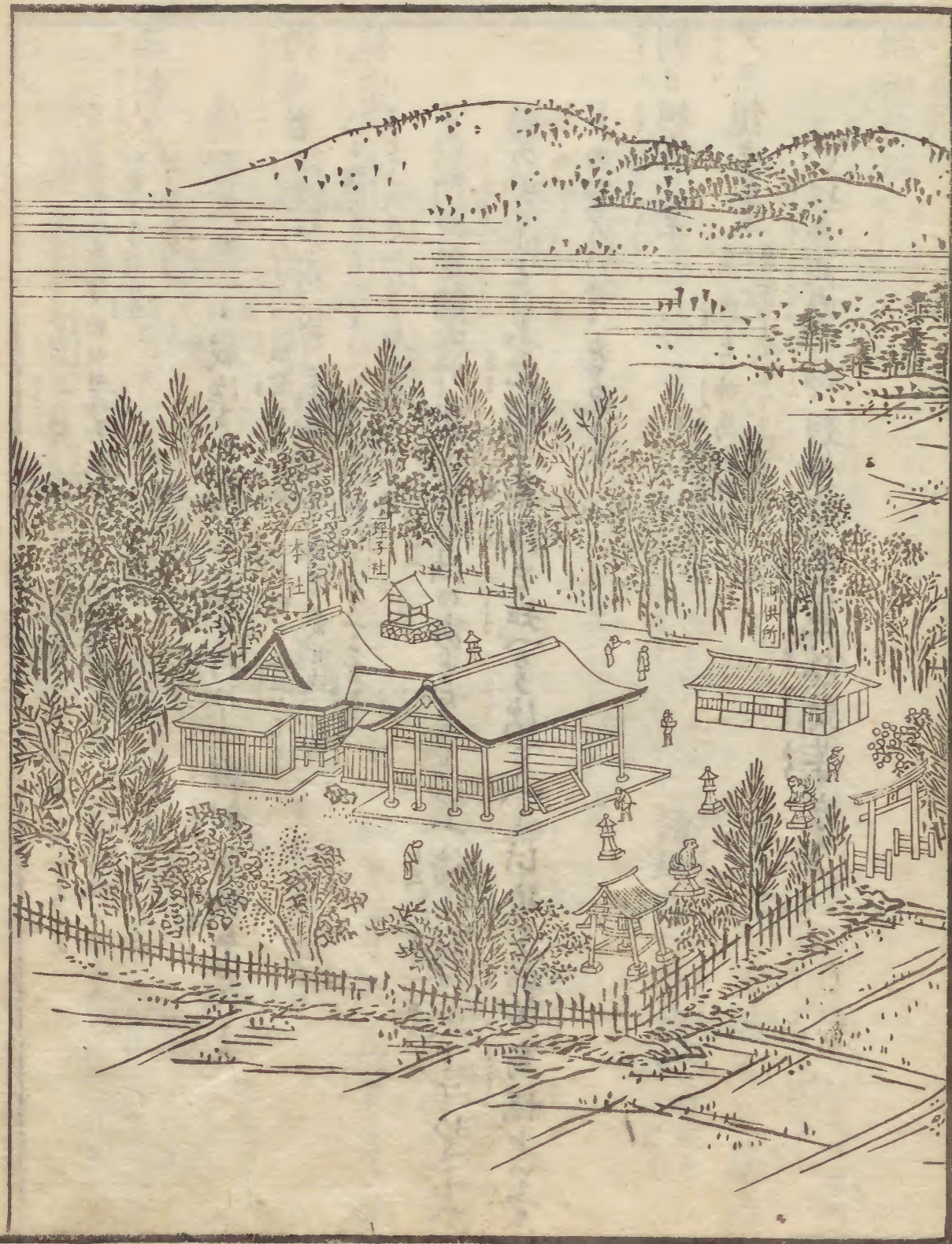




其三
鎬流馬

て軍勢も二萬餘なりそねるの隆色を助けたりされば鹿を子
里の野に放つなむべし大内家の人多くとも隆色をへえ敵も敵まじ
てい鹿狼よりも恐ろしと思ふべきを何條助くべきをい宣ふべき
それ等の謀はたとへば隆色をていなきぞ已等へ命が生たくも
降糸小出べし高も小糸小縛られ赤頸もさすとい口惜と思はむやい甲
斐なれ者どももなと念りなきば彼者ども殿の運の極や敵くまを助
べしとりふちをえせ推量と先づして賢顔は宣ふをけるなれ吾もまづ
降糸して敵の根体をもうかひまこと立歸て諫言を納せりべしとて
ちつれく降人と成る程ひひとりく偶ひゆき谷隈岩陰よて悉く
頸を刎りたり中畧弘中父子味方勢をこれの夜のるふ或は付れ又一方
便て生執れたるなりたるに今た主従三人小ありにり彼等々捨
ゑたりつる弓籠と取て寄るを散くは射立三月までいふこれ居る

けさか嫡子中勢いで最後の軍勢とて郎等一人脇よたて偃月刀うち
振て出たりたり寄るも夜の肉より柵の中へ詰りけ待居たりたる中
勢と兄と喜先よ付取んと馳寄たり中勢へ聞ゆる長刀の達者な
れい水車小廻しを切て多うたるが取一務歩の細路岩の迫を傳ひ
糸を潜るを通る不なれは傍よりゆくべき根もなく寄る多勢たり
といどもたが一務合の務負のそみみ空しく見物して居たりたり
中勢獅子の洞出虎の一足なると長刀の奥儀をこの時と能り
糸を乱して戦ふるなどに集一人よ切られ寄る糸負死人多く
出来さすども中勢ハ落るをい負たりたりけり取よ吉川勢小
小段越中内なるかの後ろよおたりたるが先一行(きなる)岩を傳
ひとりて若やと遠矢は射たりし中勢が弓の肩さなるとに
立たりたるは中勢も痛まなれはと漂ひて倒れんとはる



速田社
はやたしや

三剣窟 龍が居る場所
傳へり卷一は載はると後三段は折れ御剣を納めると

繪馬岩 同上の上敷十丈の巖登ち中央小馬の形を畫かす
龍窟 一は護摩谷の巖といふ盤石上より覆ひくつて一は室屋の
この所ハ弘法大師護摩脩法のあとなりといふ傍に松の洞といふへ

龍の出といふ穴あり其深さ知らざればは邊を龍が馬場といふ
名の起りハそなるべし

朝日觀音堂 此の處より神馬庭町地
夕日觀音堂 此の處より神馬庭町地
○以上島内の神祠佛觀勝區故跡等なり

地御前社 嚴島を去ること三十六町佐伯郡地方あり

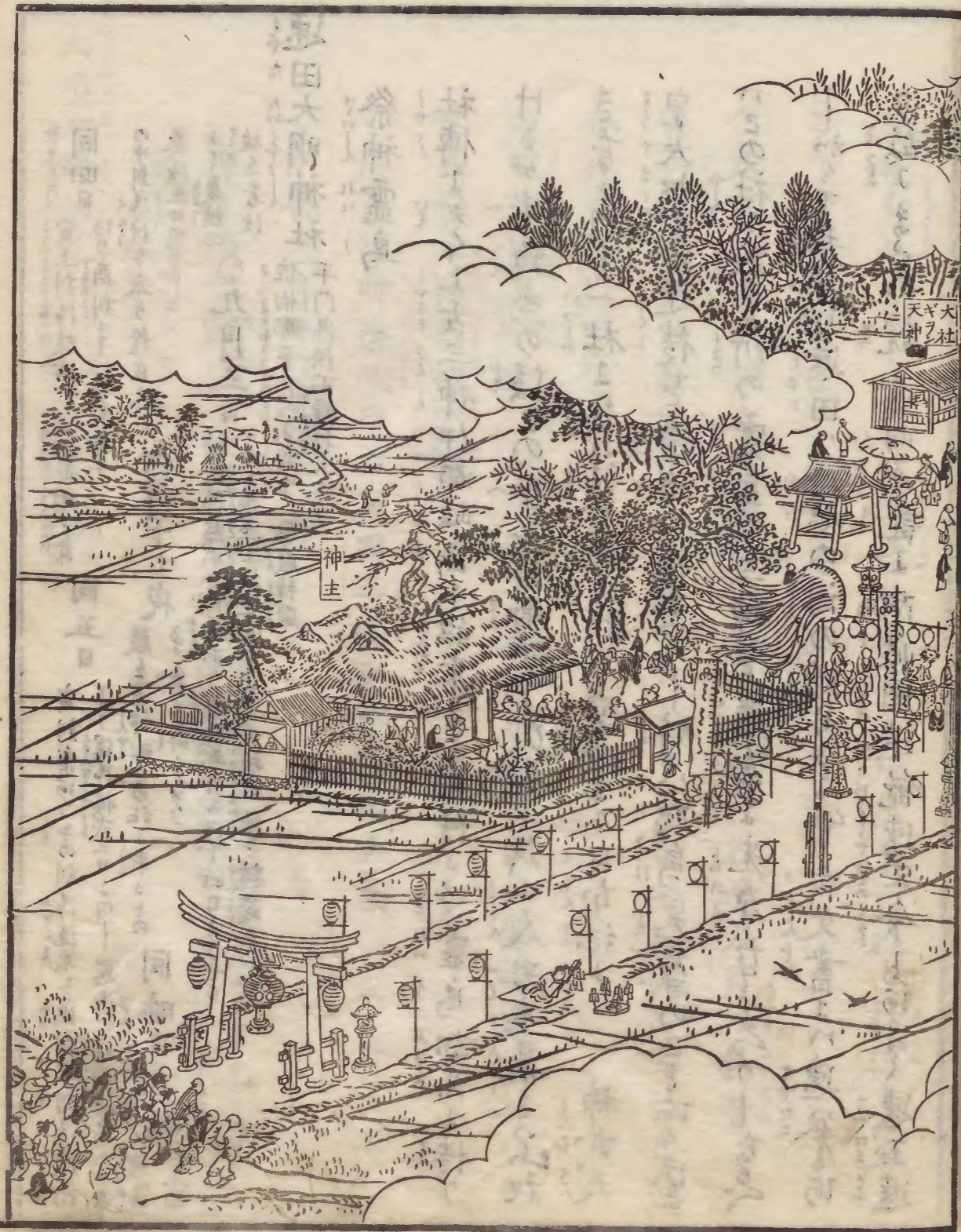
本社正殿六座 客人官五座

幣殿 奉社客人官 拜殿 鳥居 鐘樓 樂屋 觀音堂 毘沙門堂

當社の創立年月詳ならずといふ嚴島神廟と同時の鎮座よし
清盛重脩ありといふ傳はり

正月元日 嚴島より諸祠宮後海へて祭事とす
二月朔日 下毎月抄
五月三日 嚴島の初宮後海へて祭事とす

種を奉る式 舞東遊等け日神樂舞族不(出)行行列ハ警音躰仕人三種神益獅子神馬樂人社司諸職司檢査至



同日 寅上刻湯旅所にて奏樂椰子舞

同日 寅刻樂あり午の刻湯洗米を供せ未刻湯旅所より選湯儀式三日より選湯の後鑄流馬あり未

奏次三日のごとく

六月十七夜 嚴島神社の社に來るとの

同晦日大夜 鳥居の正面

九月三日 神乐湯旅所(夜)あり祭後五月十日(日)より七日

権座主新加堂より大般若經を轉讀せ

速田大明神社

佐伯郡平良には鎮座○幣殿拜殿

祭神靈鳥

社傳云く上古三神伊都岐島に臨幸ましくける時靈鳥部曲に侍りけるが湯鎮座の後この平良の郷小とび去り城土人岩本某と云れ

きたなこれを一社に勧請せりといひ案次る小同本紀に 神武天皇大和皇の遷徙を退治したまはり一時八咫鳥先守のことありは

この社に祭る所の靈鳥も三神を嚴島に先守たりまはり一かゝて考れり速田ハ八咫の祠の轉せりや古文書に速谷とい

り故はまこの説にハ同予記に阿岐國造能速玉命といはるる速玉速

谷言を近一もくハこの國造を祭りたる人といれと社傳にいふと

ころ上件の如くなれをその是非今はと未加し

○延喜神名式曰安藝國佐伯郡速谷神社名神大月次新嘗

○三代實錄曰貞觀元年春正月廿七日甲申安藝國從五位上速

谷神社叙從四位上

○類聚國史 月次祭 曰弘仁二年七月安藝國佐伯郡速谷神伊都

岐島神並預名神例幣

○延喜臨時祭式曰安藝國三座速谷嚴島多家

例祭十一月中の申日

惠美須社 瑞籬の内 ○岩本権現社 伊社より二町をかり神のうま林中あり平良の地

鐘樓 文明年中の

大頭大明神社 外宮を去ること三十町佐伯郡大野村に鎮座幣殿拜殿を居り

祭神三座

大山祇命

佐伯鞆職

一説國常立尊を加へて三座と云

古事記 四事記を按ずるに伊弉諾尊斬軻遇突為五段一則首化為

大山祇二則身中化為中山祇三則手化為麓山祇四則腰化為正

勝山祇五則足化為離山祇と有りまこと一は三則腹化為奥山祇とも

云たり今この社の末社中山垣を奥谷などいふ所は小祠ありて里人

これを尚社身此神といひ按ふ者社の首為大山祇といふより大

首と称せしなるらん 首を後訓はさきま 又頭の字よりなるべし 中山奥谷に中山祇奥山祇また垣

を離山祇の轉訛ともいふ一は堅固の愚案なればはて来てかり

といふいある次看官後また次下

例祭九月廿八日

巖島の祠官ことく渡海し神供を奉るその式 古風を存せり 神樂を奉る

○毎年の九月廿八日小に鳥の別といふこと有り尚社の祠官多居の傍に

食を供し神樂を奏次は神樂一対とび来り神供をへくるなりを

もくこの神鴉といふを弥山の条に記さごとく往古より一対年々相

續せり三月の末より雌鳥巢を作り雛鴉一対を育次故に巖嶋

島巡り日月のころは雄鳥たひひとりのおつ六月の末七月小至て身

子鴉を率ゐ養父寄の清社小出て鳥喰上のこと所學はむ八

九月のころは親子二対ともに出つ然るまこの廿八日小至て親鳥一

対来りて鳥喰をへげ終りて行方し次その翌日より子鴉一対

の養父崎の鳥喰を出ついより一年もたぶことなり且巖

島より大野まで一里余の海を隔たるまこの日の時刻をうらむ次

た久次して飛来るも靈奇ふある次や

そ行りて又長く長月廿一日地清前といふところのぬひがよ

り山路に入るむに大野の山中といふところになまこり好長

月のついでとび来りて本の下露まきまよむなり



次不せくお糸のいろ濃く見渡されたる中よ志ひの葉の
嵐よりうなひきて松のうま山河のねとふ音きあひるあは
ちうけふふくみくわえさう

とよかふしうゆ命をたふかこつゆいそちねふの中山 源貞世
むい誰が蔭もせんとも推のねあ中山かへげらん

この山をさけ下りてまこ浦小出さうむうひの山へ巖島山のみ
ちよめたむれまらうゆき免ぐうてちちあなうまふまらう

よたるれと胡佐西のうこさ出る友ふ祿大船ともいま
を追風よ帆うげも足ゆえるふ祿なる人もこたあこを申じ
と足おを次承る

ねふの浦をさうとつ山梨のかこえのふみだいろに出つ

この舟どもの中ふ朝氣のいとちと次るとく燈のちまのほりつ

波ふるつらちりーたんあらん人小足さまあー

なみの上ふもしほやくうらんえさういあまれ小舟またく火をりう

天王社 佐伯郡宮内 祭神不詳

或ハ千頭大皇を祭るといひまこハ神武天皇ともいり例祭九月十日

大瀧大明神社 佐伯郡大竹 祭神湍津姫命 例祭九月十九日

官幣社 沼田郡下安村 祇園小町

此社より毎年社人幣帛玉津をとめて嚴島初申の祭りに奉る

これ往古奉幣使のたちる時よりの例式とを官幣の名にこれよれ

るなるへーまここの所社小癒瘡を祈りて神験あな

惣社 安曇郡府中村

南振社 同所

府中上郷田取氏

官幣社

官幣といは神祇官より幾内幾外の諸社へ進らる幣にて其を
延喜日記時祭式に祈年祭神大四百九十二座
三百四座案上官幣
一百八十八座園司所祭



久陽

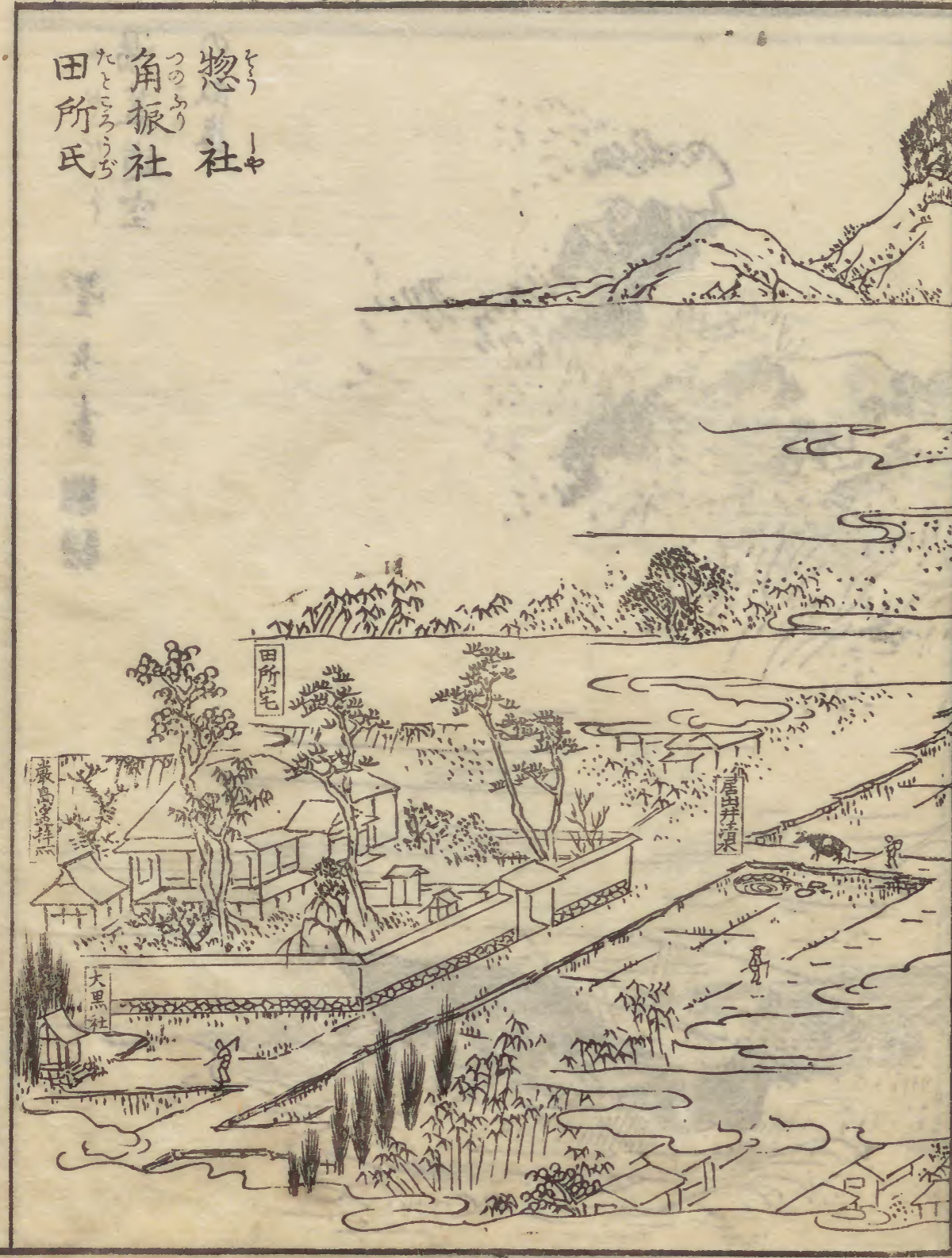
とあれこの案上官幣のことなりこれに預りたまふ神當國よそ
速谷神社たゞ一座の外に於てはまさしくその祭儀の式も平明
奠幣物於齋院案上并案下掃部寮設座於内外神祇官人
率御巫等入自中門就西廳座東面北上大臣以下入自北門
就北廳座御巫就廳下座群官入自南門就南廳座北面東上
神部引祝部等入立於西廳之南庭訖而神祇官人降就廳前
座中臣進就座宣祝詞每一段畢祝部稱唯宣訖中臣退出大臣以
下諸司拍手兩段不稱唯然後皆還本座伯命云奉班幣帛史稱
唯忌部二人進夾案立史以次唱御巫及社祝各稱唯進忌部頒
幣帛畢史還座申頒幣訖諸司退出と見えこれ毎年二月二日
のことなりかくまでも嚴なる朝廷の常典なりと世の衰へゆくま
よいつり式内の名神も無きが如くなり果例年の祭りも無り
たりん既に三善清行の意見封子小祈年祭のこと成あけて即
以幣絹捧著懷中掖棄梓柄取其鉞頌其兪酒一舉飲盡曾
無一人全持出神祇官之門者といへり當時もさうまゝといえ
んや保元平治の乱後をや式文の行きざりんこと枝もひやほし

かれを速谷の官幣も断絶つゝもさうなり然る小平清盛はこ
の嚴島の冥助小よりて一品の尊位より相國の極官小至
りたまひいづくふりく信仰の思ひをそこびて終に朝廷に奏聞し
當社を官幣の列におき免たまへりけり予に山槐記治承三年
二月廿九日の件に詳し記したまひて卷五小載さるりその後
源頼朝公天下の權をとらたまひより専朝廷いやく衰へこま
ひて官幣の式もあつたなりつゝ免れども國府よりさ次くは旧き
を失ふに田所職をこむる人かこのごとくの礼を行ひたりと
もつるその證に田所氏と官幣社の祠官と初申の祭に奉仕を
する類して志すべし然いあれども今の祭儀はたゞ告朔の饗羊
を古へを觀る不足ることありあつたされば官幣社の後世のやし
ろめて田所氏田所氏のこと志なきゆゑに社を構へたりるがいつと
とをたせられて淨地を幣をたぐ屋代を構へたりるがいつと
社とたせられて延表式の官幣小拘る所ありあつたべし

府中村に位て嚴島社二月十一月初申祭奉幣のこと其掌たり祖先
佐伯某 推古天皇の侍宇よりけ處小位然るよりなれども遷た
る上世のこと故に典籍の徴と次べきなり延喜年中小佐伯資隆と
いふ者ありそより今小至て三十六代血脈お績まといひ然れども
家乗記録ハ文永二年二月十五日の祝融の災は焼失せしむたよ本
詳らなる次た餘燼の逸書よりてそ其大概を記すの久壽二年
は佐伯則兼大番より上京一元弘三年小後醍醐天皇隱岐の島より
り伯耆の船上小舟遷座のと死方とて佐伯七郎未志と系りし
らバ頭中将政忠心を以て敵感の倫旨をたまへり建久三年九月三日
宇治合戦のと死 今按は此の合戦のこと太平記十七の卷に所見なり綱目は曰く神代茂
五郎兼治が扶を以て見る小延元二年八月十三日小義貞京師の後合戦
兩三度小及ふと見えたり比まども今本文を考ふるに比るの合戦の事依りしりかた次といひ建久
三年ハ即ち延元改元の年までこの事の上作の如くなれ九月三日の宇治合戦もいま詳ならず比
あらくたうちかこ 且利尊氏公より歎状を下され正平六年ハ南朝へ軍忠を勵し

小より當國河戸村を兵糧料として阿てたまはるり其際世く田取
職をうねて奉幣の奉幣ハ更もいを次公家一方の二藩鎮ともたり居た
りしとど大内義隆ハ当國よりち入の時五石余の米地を削り去り
て小家も絶ちんとせし知毛利家より奉幣雜費料として五百石た
まはりし小また福島氏小削られ漸く今のさままはなりき○二月十日
初申祭ハ十一日以前の戌の日の夜より濂斎一その翌日小御幣をとるへ
酒宴をなれこれをおえげといひまこ一のよごろともいふその翌午の日小
たりて府中惣社小於て神楽を行ひ夜小入て府中川より船小のり
渡海もその儀濂斎所より排をたてさせ路次の不浄を拂はむ故
よけ日よかきりて排を懸置といふそれより嚴島の有の浦まで死て
棚子家へ着岸のよけ告ぐ 以下のこと年中
行きの部はさふ
抗島 嚴島より廣島へ渡海
の中途より南廻三町

惣社
角振社
田所氏



岩観音





湯蓋道空

湯蓋道空
の故事

豊長畫



俗傳云三女神等扱を投なまひるが島しまとなるなりたりと島上しまのうへ湯ゆ
 蓋道空かざのちやうくうの墓むらり乃空なへは佐伯郡さへきこがりいづら五日市いつひいち海うみ老山らうざんのむす夫婦ふうふ次つぎて
 その身こ貪ましく渾みを業ごうとなけり小巖いづこ多た大明神たいめいじんを信しん仰かうし造次ぞうじ
 顛沛えんぱい小こねこるる次つぎ念ねんし奉たり毎日まいにち神かみ供くの魚うをを捧たげ誠實せいじつの志こころざし
 を感かんしたまたまひひるるや或時あるとき島しまの沖かき蓮菜れんさい浮う出いでて空くうが舟ふね全ぜんの
 砂いさごのなかをゆゆくらくら如ごとくなりし紙かみ紙かみやや思おもひひてその砂いさごを船ふね子こ汲き入いり
 より家いへ常とこえたたのももし紀元きげんととるるよりよりけり湯蓋ゆがいを苗字ななづか小こななせせることことへ家
 の傍かたはらより温湯ぬるまじ湧わ出いでせせししふふよよけりけりととををいついつの頃ころより客人きやくじん宮みや破やぶ壊くわいせせししる
 空いっせ一世いっせいの金銀きんぎんを以もて修造しゆぞうし奉たりりととぞぞ今いま乃な宣のたま夫と婦めの像ざう五日市いつひいち
 塩屋しちや大明神たいめいじんの社内しゃうちふあり

巖島圖會卷之四 終



